

着衣量と環境温度における温熱的快適条件（第3報） 性、人種、気候順
化の度合による着衣量および環境温度の差とその考察

山口大医・公衛 ○酒井恒美

大阪教育大学 奥窪朝子

目的 温熱的に快適な条件にある着衣量および環境温度において、実態として認められる男子学生と女子学生間、日本人学生と英国人学生間および熱帯地域からの留学生で滞英期間の短い者と長い者の間の差を明らかにし、第1報で得られた成績との関連において考察する。

方法 第1報におけると同様である。

結果 女は男に比して、着衣の clo 値は低い、環境温度には差がみられなかった。皮下脂肪厚は、女の方が大きかった。日本人は英国人に比して、着衣の clo 値は高く、環境温度は低かった。皮下脂肪厚には差がみられなかった。滞英期間の短い者は長い者に比して、着衣の clo 値は高く、環境温度は低かった。皮下脂肪厚には差がみられなかった。認められた実態と第1報での成績との不一致は、影響を及ぼす因子を固定して検討すると、矛盾なく説明することができた。一方、着用衣服が快適であることの第1条件にその温かさをあげた者の率は、女の方が男より低く、日本人の方が英国人より、また滞英期間の短いの方が長い方より高かった。これらのことから、次のようにいえると考え。①女は男より薄着を好むが、皮下脂肪厚が大きいため、温熱的快適性をうるための環境温度に差がみられない。②日本人は英国人に比して、温熱的快適性をうるために、環境温度よりも着衣に強く依存している。③寒冷への順化の度合いが低い者では、温熱的快適性をうるために着衣に強く依存しているが、気候順化が進むと温度への依存が強くなる。